

公益社団法人日本小唄連盟

第六十回記念演奏会

平成二十七年十月十七日(土)

十時半開場・十一時開演

国立劇場・小劇場

主催 公益社団法人 日本小唄連盟



御 挨拶

錦秋の候、皆様ご清栄の御事とお喜び申し上げます。

平素は小唄連盟に格別のご温情を賜り、また本日は、第六十回記念公演に御来場頂きまして、厚く御礼申し上げます。

この度は、平成二十四年に公益認定されましてより初めての記念公演という事もあり、早い時期より各派代表の皆様からご意見を頂戴致し、先ずは多くのお客様にお楽しみ頂けるプログラムを目標とし、内容は小唄以外のものは加えず構成致しました。その結果、本日は昼夜二部制の公演とし、第一部を古典小唄、第二部は、芝居小唄をお聴き頂きます。江戸小唄は、小唄が創作品として形をなした嚆矢として清元お葉が十六才の時作曲した「散るは浮き」とされております事から、先ずは順を追ってお葉作品四曲から江戸小唄をお楽しみ頂きます。そして一部後半は上方小唄を、関西支部の皆様を皮切りに各派中堅代表者の皆様をお願い致しました。

第二部芝居小唄では、大正後期から昭和初期、それまでの江戸小唄から次の時代を大きく見据え、芝居小唄を確立させた吉田草紙庵の作品を中心に楽しみ頂きます。時代の要請により変化しつつ歴史を繋げてまいりました小唄が、現在は古典小唄と芝居小唄が見事に共存してご愛好の皆様により継がれております事は、大変好ましい事と存じます。後半は歌舞伎の六興行に因んだ名曲の数々を、初春興行から顔見世興行までご堪能頂きます。本年は、小唄「散るは浮き」より百六十年ということもご縁を感じますと共に、この大きな節目に次代に向けての新しい若い皆様が序幕「花筏」を飾って下さった事も、小唄界の未来に明るい兆しが見えたもの思いでございます。これからも皆々様の更なるご支援をお願い申し上げます、御挨拶とさせていただきます。

平成二十七年十月十七日

公益社団法人 日本小唄連盟

会長 春 竹 利 昭

第一部 古典小唄

《江戸小唄》

1 散るは浮き
松平不昧公作詞・清元お葉作曲
清元お葉作詞・作曲
あの花が

唄 糸 替
蓼 蓼 蓼
胡 茂 茂
茂 和 香
喜 代 香

2 主さん
清元お葉作曲
隅田川

唄 糸
松 松
峰 峰
照 照
香 照

3 好いたお方に
初代平岡吟舟作詞・作曲

唄 糸
竹 竹
枝 枝
せん 千
喜 美 雪

4 雪のあした(朝)
三世清元順三作曲
いざさらば

唄 糸
飯 飯
島 島
ひろ 都
馨 江 代

5 二人が仲
のび上がり

唄 糸
蓼 蓼
胡 時
満 あ
時 代 や

番

6 青年の瀬とや

唄 糸 替
花 花 花
菱 菱 菱
朝 は 朝
如 満 は
朝 朝 る

7 今宵は雨
藤沢浅次郎作詞・新橋おかね作曲
寄りを戻して

唄 糸 替
春 春 春
竹 竹 竹
利 利 利
保 葉 香

8 夏の雨
初代永井ひろ作詞・作曲
清元菊寿太夫作曲
都鳥

唄 糸 替
常 常 常
磐 磐 磐
と ま な
も さ み
米 米 米

9 五月雨に池
川田小一郎作詞・清元お葉作曲
いろは紅葉

唄 糸 替
蓼 蓼 蓼
胡 鈴 輝
鈴 鈴 光
子 緒 緒

10 ぶらりとしては
清元菊寿太夫作曲
いくら口説いても

唄 糸
蓼 蓼
津 胡
留 可
好 朋

組

11 初代清元菊寿大夫作詞・作曲
あごで知らせてに
初雪

替 糸 唄
蓼 蓼 蓼
津留浅よ
史 実
胡よ若

12 待つ夜重ねて

糸 唄
井 井
筒 筒
治 幸
幸 樹
滋

13 葉ざくら
河竹黙阿弥作詞・二世清元梅吉作曲
空ほの暗き

糸 唄
永 永
井 井
井 井
ひろ 扶美香
ひろ 扶美

14 折りよくも
目見えそめし

替 糸 唄
小 小 小
唄 唄 唄
幸 幸 幸
三 三 江
希 由

15 都以中作曲
空や久しく

糸 唄
蓼 蓼
胡 胡
三 菜
竜 三

16 いつしかに
今朝のわかれ

糸 唄
堀 堀
小 小
り 仁
く 敏

17 清元太兵衛作曲
残る月
春雨に降られて

替 糸 唄
蓼 蓼 蓼
胡 胡 胡
葉 葉 葉
助 菊 祇

18 川のだるま風
雪の

替 糸 唄
菊 菊 菊
岡 岡 岡
弘 弘
優 弘 美

19 尾崎紅葉作詞・二世清元梅吉作曲
止めても帰る
粹なからす

糸 唄
長 長
生 生
松 恭
帆 帆

20 三世清元順三作曲
月は田毎
酒と女

糸 唄
菊 菊
地 地
満 満
佐 佐
代

21 虫の音

替 糸 唄
蓼 蓼 蓼
競 競 競
文 文 照
芳 文

22 大槻如電作詞・作曲
時雨して
蚤が茶白

糸 唄
若 若
宮 宮
弓 三
鳥 千
貴 弓

23

書送る

唄 唄
井 井
筒 筒
幸 幸
清 喜

24

藤沢紫水作詞・岩井町人作曲
青柳の叩かば
西行さん

唄 唄
小 小
唄 唄
幸 幸
三 三
卯 卯

25

茶の科
からかさ

唄 唄
本 本
木 木
寿 寿
以 以
香 香

26

三世清元齊兵衛作曲
五月雨や(空)
初代平岡吟舟作詞・作曲
切れてくんなますな

唄 唄
替 替
蓼 蓼 蓼
津 葉
留 留
浅 浅
史 史
実 幾

27

鈴木秀雄作詞・佐橋童子作曲
さくらさくら
宮川曼魚作詞・初代竹枝せん作曲
気に入らぬ

唄 唄
蓼 蓼
富 富
轟 轟
子 子
舟 舟

28

広い世界
初代平岡吟舟作詞・作曲
たれと根岸

唄 唄
栄 栄
由 由
利 利
奈 奈

29

一と声を花の
初代永井ひろ作詞・作曲
世辞で丸めて

唄 唄
蓼 蓼
満 満
桜 桜
蓉 蓉

30

初代平岡吟舟作詞・作曲
逢うて別れて

唄 唄
松 松
風 風
若 裕
裕 秀

31

水さし
待てと言うなら

唄 唄
替 替
常 常 常
磐 磐 磐
米 米
由 由
布 布
弥 弥

32

君が仰せ
ま、になるなら

唄 唄
竹 竹
枝 枝
千 千
和 穂

33

待ちわびて(遅い)
歳に一度

唄 唄
替 替
田 田 田
村 村 村
弓 て
路 路
み ち

34

木の枯の
又のこ見

唄 唄
蓼 蓼
胡 満
満 桜
桜 寿

35 ちよいと出るにも(雪)
初代平岡吟舟 作詞・作曲
三つ の 車

唄 田村登美子
糸 田村てる

36 三世清元順三 作曲
浮気 同 士
細井鶴郎 作詞・吉田草紙庵 作曲
逢いたさに

唄 千紫信子
糸 千紫ゆい

《上方小唄》

37 心で止めて

唄 葛木伸子
糸 白扇夕樹夫

38 八重一重
任せたから

唄 柳古柳
糸 柳古美乃
替 柳和加丸

39 向う通るは
渡辺の綱やん

唄 扇路都美子
糸 白扇夕樹夫
関西支部

40 与作おもえば
西の方より
唄 里園志津代
糸 里園志寿鈴
関西支部

41 梅が枝さん
三世千世界
唄 竹村てる花
糸 竹村てる菜

43 江戸の人
唄 田家松小峰
糸 竹枝せん喜美

44 わしが在所
夜
唄 若宮三千代
糸 若宮三千鶴
替 若宮三千恵

45 つがいはなれぬ
人と契るなら
唄 吏美いち絵
糸 吏美久絵

46 土手を通るは
都ではやる
唄 田村てる
糸 田村彌笑

51

わ
し
が
思
い

替 糸 唄
松 松 松
峰 峰 峰
弥 照
生 香
乃 照

50

紫 は
の ん
ゆ な
か り
り と

替 糸 唄
蓼 蓼 蓼
茂 茂 胡
喜 和 香
代 香 茂

49

銀 ち
の よ
ピ う
ラ さ
ピ や
ラ よ
う
さ

糸 唄
蓼 扇
胡 よ
文 し
雄 和

48

腹 可
の 愛
立 い
つ お
時 方
や

糸 唄
ふ ふ
じ じ
松 松
亀 加
美 奈
恵 子

47

紺 水
の の
前 出
垂 端
れ 端

替 糸 唄
長 長 長
生 生 生
千 真 松
代 帆 代
由 帆 代

ご
挨
拶

御祝儀

三番叟

楠瀬日年作詞
吉田草紙庵作曲

唄

不二	峰村	常磐	蓼	蓼	菊地	本木	松風	柴
小みち	好美佐	まさ米	胡満佳	津留葉	満佐	寿以	若裕	よし

糸

常磐	本木	蓼	蓼	花菱	蓼	竹枝	蓼
とも米	寿以田鶴	胡満喜世	胡伊葉	は満朝	競雪野	せん喜美	胡満時代

本調子

とうとうたらり たらりら

ところ千代まで萬代の

鶴と亀との嶋台に常世むすぶの式三献

おうさえおうさえ 悦びありや

我このところよりほかへはやらじと思う

一つ思いに二世の縁

三世をかけし四海波静かにて

枝も鳴らさず葉もしげる

さまはナー百までヨーわしゃ九十九まで

ヨー ようようよい仲孫ひ孫

末広がりの末かけて

第二部 芝居小唄

52 花河上漢介作詞・宮川吟柳作曲の雲

唄 糸 替 蓼 蓼 蓼 胡競静 競文 競文 芳

53 夜の雪

唄 糸 蓼 蓼 房 邦 毘 舟

54 三吉野高谷伸作詞・里園志寿茶作曲

唄 糸 低 長 長 長 生 生 生 奈美弘 真帆 奈美呂

55 浅黄幕岡野知十作詞・吉田草紙庵作曲

唄 糸 飯 飯 島 島 ひろえみ ひろ妙

56 きお中内蝶二作詞・三世清元梅吉作曲い肌

唄 糸 堀 堀 小 小 小 小 寿鳳 寿々

57 緋桜笹川臨風作詞・佐橋童子作曲や

唄 糸 竹 竹 枝 枝 せん喜美 寿

58 箕輪心竹柴蟹助作詞・鶴賀朝太夫作曲中

唄 糸 上 蓼 蓼 蓼 胡鈴扇 津留好 宏

59 二年越伊東深水作詞・千紫千恵作曲し

唄 糸 低 蓼 蓼 蓼 鈴子正 胡鈴子 緒

60 初出見よとて

唄 糸 堀 堀 小 小 小 小 治由紀 小 小 小 小 寿々

61 身室町京之介作詞・四世富士松亀三郎作曲は空蝉の

唄 糸 上 花 花 花 菱 菱 菱 朝紀美 朝紀美 朝紀美 三

62 信伊東深水作詞・佐橋童子作曲濃屋

唄 糸 蓼 蓼 史ま由 胡文雄

63

室町京之介作詞・四世富士松龜三郎作曲
お吉しぐれ

上 糸 唄
蓼 蓼 蓼
競雪野 福温
競文芳

64

市川三升作詞・吉田草紙庵作曲
上野の鐘

糸 唄
蓼 蓼
津留稚加
胡文雄

65

中山小十郎作曲
今日一日

低 糸 唄
竹 竹 竹
村 村 村
てる千恵
てる花
てる菜

66

宮川曼魚作詞・吉田草紙庵作曲
青柳の糸より

上 糸 唄
峰 峰 峰
村 村 村
好美有
好若
好志乃

67

初代清元菊寿太夫作曲
こうもりが

糸 唄
松 松
峰 峰
小玉
照

68

どうぞ叶えて

糸 唄
蓼 蓼
競雪野 胡正沙

69

初代平岡吟舟作詞・作曲
春霞引くや

替 糸 唄
松 松 松
峰 峰 峰
照美
弥生乃 照

70

伊東深水作詞・清元毒兵衛作曲
辰巳の左褰

糸 唄
佐々舟 佐々舟
正子
洋

71

当代めずらし

糸 唄
蓼 蓼
奈美輝
鈴緒

72

久保田万太郎作詞・山田抄太郎作曲
目に青葉

糸 唄
千 千
紫 紫
いそ巳
巳恵佳

73

花柳章太郎作詞・中山小十郎作曲
佃の渡し

ソレ 糸 唄
永井ひろ美藤
永井ひろ扶美
永井ひろ扶美香

74

浦上紀庵作詞・吉田草紙庵作曲
十六夜清心

糸 唄
菊 菊
地 地
満佐知
満佐知

75 権英十三作詞・山口こう作曲九郎

唄 飯島ひろ喜
糸 飯島ひろ馨江
替 飯島ひろ喜扇

76 曾根崎小野金次郎作詞・中山小十郎作曲

唄 本木寿以裕
糸 本木寿以田鶴

77 心河上漢介作詞・春日とよ作曲あだし野

唄 蓼 胡満千加
糸 蓼 胡満沙
上 蓼

78 めぐる日

唄 井筒綾美佐
糸 井筒幸一

79 さ一声は月が
つ ま さ

唄 胡伊葉
糸 胡文雄

80 縁新内鶴三郎作曲でこそあれ

唄 胡一舟
糸 鈴緒
上 蓼 毘舟

81 湯上りに川尻清澤作詞・十二世片岡仁左衛門作曲

唄 美季好
糸 幸村美枝

82 明治一代女花柳章太郎作詞・春日とよ年作曲

唄 房まさ
糸 房まさ香
替 蓼 まさ八重

83 松立てて

唄 延は留
糸 蓼 津留好

84 か細井鶴郎作詞・四世富士松亀三郎作曲つぼれ

唄 綾奈美
糸 井筒香弥乃

85 仇情八幡祭小林栄作詞・中山小十郎作曲

唄 胡満和
糸 胡満千加

86 露小林栄作詞・初代本木寿以作曲深き

唄 治幸滋
糸 井筒幸一
替 井筒幸和

87 網は上意

糸唄 竹葵村 仁美 てる花

88 高時 永井素岳作詞・三世杵屋正次郎作曲

糸唄 堀堀 小よ寿々 小りく

89 滝の白糸 長田幹彦作詞・吉田草紙庵作曲

糸唄 竹鳳村 美翠 てる花

90 勧進帳 吉井勇作詞・十六世杵屋六左衛門作曲

糸唄 井井上 つる一 恵美竜

91 黒髪 遠藤為春作詞・吉田草紙庵作曲

糸唄 鶴佐村 寿々豊 洋

92 牡丹灯笼 英十三作詞・吉田草紙庵作曲

糸唄 錦乃 錦乃 まい 太郎

93 うらぶれし 河上溪介作詞・宮川吟柳作曲

糸唄 北海道支部 蓼蓼 胡政清 競雪野

94 川竹 小野金次郎作詞・新内鶴三郎作曲 新内志賀太榊節付

糸唄 九州支部 本木寿以 本木寿以 光

《初春興行》

95 三千歳 市川三升作詞・吉田草紙庵作曲

糸唄 菊岡 弘多枝 弘

96 峠の万歳

糸唄 松松風 若裕 美く実

97 宵のなぞ 哥川亭作詞・吉田草紙庵作曲

糸唄 華華兆史代 華華兆史代

101

桂

川

《阜月興行》

低 糸 唄
花 花 花
菱 菱 菱
朝 朝 は
三 佳 満
朝

100

しがねえ恋の情
市川三升作詞・吉田草紙庵作曲

上 糸 唄
幸 松 幸
村 峰 村
美 美
季 照
好 枝

99

緋 鹿 の 子
田島断作詞・吉田草紙庵作曲

糸 唄
柴 柴
よ よ
し し
仙 し

98

与 三 郎
市川三升作詞・吉田草紙庵作曲

糸 唄
不 不
二 二
小 小
そ み
乃 ち

《弥生興行》

106

毛 荆
英十三作詞・吉田草紙庵作曲

糸 唄
田 田
毎 毎
てる てる
幸 三

105

木 小 屋
岡野知十作詞・吉田草紙庵作曲

糸 唄
本 本
木 木
寿 寿
以 以
田 鶴

104

夕 立 の す ぎ て
岡野知十作詞・吉田草紙庵作曲

糸 唄
蓼 蓼
競 胡
雪 野
野 治

《お盆興行》

103

夕 顔 棚
平井正一郎作詞・平井承知庵作曲

糸 唄
峰 峰
村 村
好 好
若 美
佐

102

神 楽 ば や し
青木空声作詞

糸 唄
千 千
紫 紫
巴 伊
奈 登
恵 恵

《お名残興行》

107

江戸育ち
三里庵作詞・吉田草紙庵作曲

糸唄
栄栄
美由
つ奈利

108

河庄
竹柴蟹助作詞・豊竹巖太夫作曲

糸唄
常常
磐磐
とまさ
も米

109

佐七
英十三作詞・吉田草紙庵作曲

糸唄
菊菊
地地
芳満
月佐

《顔見世興行》

110

落人の色香
竹柴蟹助作詞・歌沢寅作曲

糸唄
蓼蓼
胡満千加
胡満佳

111

編笠
木村富子作詞・春日とよ作曲

糸唄
蓼蓼
胡津留葉
宏

112

吉三節分
田島断作詞・吉田草紙庵作曲
岡野知十作詞

糸唄
吏春
美竹
いち利
絵昭

御祝儀

世のさが

英 十三作詞
黒崎 茗斗作詞

唄

唄

唄

系

小唄 幸三江	井上 つる一	田家松 小峰	若宮 三千代	ふじ松 加奈子	扇 よし和	田毎 てる三	松風 若裕	華兆 史乃	藤本 秀葉	菊岡 弘	葵 仁美
吏美 いち絵	蓼 胡治	本木 寿以	菊地 満佐	蓼 津留葉	春竹 利昭	蓼 胡満佳	常磐 まさ米	峰村 好美佐	長生 松代	竹枝 紋寿	
鳳 美翠	永井 ひろ	不二 小みち	柴 よし	幸村 美枝	蓼 胡茂	花菱 は満朝	千紫 伊登恵	堀 小よ寿々	井筒 治幸滋	佐々舟 洋	
替竹 村てる花	田村 てる	蓼 史実	蓼 胡満喜世	井筒 寿美	蓼 胡満千加	松峰 照	竹枝 せん喜美	長生 松帆	小唄 幸三卯	白扇 夕樹夫	

世のさが

解説

ニ上り

世のさがを露に宿して松の葉の

しずくの流れ末広く

人の情けの幾節を

世々に伝えて

呉竹の心の花のかざみ草

手をひき合うて共に唄はん

「世のさが」とはこの世のすがた、なら

わしを指し、『松の葉』は松を、『呉竹』

は呉から渡来したと伝えられている破竹

のことで、『香散見草（かざみぐさ）』

は梅の異称で、この曲は松竹梅を唄って

小唄連盟の発足を祝い作られたものです。

小唄解説

《小唄の歩み》

戦国の世、豊臣秀吉の時代、芸能文化は京上方が中心でした。

慶長のはじめ一六〇二年頃「隆達節」と称する流行唄（はやりうた）が生まれ、人々が楽しんでうたうようになります。徳川時代、すなわち江戸になって、「弄斎（ろうさい）小唄」、「投節（なげぶし）」として、人々にうたわれ、幕末には独自の歌が生まれます。「江戸端唄」の誕生です。これを母体に、安政年間（一八五四〜一八五九年）「うた澤（ざわ）」と「江戸小唄」が産声を上げました。仮に端唄を母とする端唄から先に誕生した、うた澤は姉さんのうた、ゆっくりとしたテンポの落着いた芸風、一方の小唄は妹で、少しおきやんで、三味線がリードして、粋（いき）で闊達なものでした。この江戸小唄の誕生に活躍したのが、清元お葉（きよもと およう）（一八四〇〜一九〇一年）です。松江城主、松平不昧公（まつだいらふまいこう）の詠んだ和歌「散るは浮き散らぬは沈むもみじ葉のかけは高尾の山川の水」にお葉が少し言葉を足し作曲したのが「散るは浮き」、江戸の小唄の最初のうたです。お葉十六才の作。

そうしてこの小唄が原点となってお葉の小唄が生まれていきます。お葉十八才のとき作曲された「あの花が」は、親しかった友が嫁入りを耳にしたお葉が、うらやましく思う気持ちを表現した小唄で、艶のある節、糸のからみも洗練されています。以来清元畑の人をはじめとする多くの人が作曲に加わり江戸小唄が確立されていきます。

大正になり、昭和、平成へと小唄隆盛を支えたのは、吉田草紙庵（一八七五〜一九四六年）明治八年（昭和二十一年迄で、戦争への時代まで、多彩な活躍をしたといえます）。

清元の三味線の名手としても、その名を上げた人でした。同時に江戸小唄にも一方ならぬ思いを持つ草紙庵は、「東京小唄会」支援者たちのきもいりで出来たグループで、その指導に当たるとともに、新曲を作曲することに力をそそぎました。宮川曼魚、岡野知十、五世市川三升などの作詞を得て次々と名曲を生むことになりました。

監 修 春竹利昭

大演奏会担当 蓼 津留葉

第一部担当 蓼 胡満佳

第二部担当 栄 由利

「花筏」指導 松峰 照

蓼 胡茂

若樹会担当 扇 よし和

糸の会担当 田村 てる

お 囃 子 望月喜美連中

小 唄 解説 竹越 治夫

ナレーション 脇坂京子

公益
法人
日本小唄連盟

〒103-0012 東京都中央区日本橋堀留町二丁目三番三
グランドメゾン日本橋堀留九〇三号
電話 (〇三) 五六四一〇八三〇
FAX (〇三) 五六四一〇八三三

日本小唄連盟ホームページ

<http://www.kouta-remei.org>